

## 九州学院の創設・開校 ―キリスト教主義学校教育の始まり(上)

藤本 誠

### 一 九州学院創設へ向けた ルーテル教会宣教師社団の設立

一九〇九(明治四二)年当時、外国人が日本で土地を取得することは認められていなかった。ルーテル教会が土地を取得するためには、法的に取得可能な公益法人として認可される必要があった。同年九月、ブラウンが「Lutheran Church Visitor」に書き送った文書に、次のように記されている。

「現在の日本の法律で、外国人には土地取得が許されていない。但し、一定の条件が整えば、日本の法律による社団あるいは財団の組織ではそれが可能になる。財産の取得を目的とする社団の設立のために東京に行った。その結果、三ヶ月後に、日本政府により社団の許可が下った。三ヶ月も待たされたことは、土地取得

のためにも良い機会を与えられたことになる」

(「Lutheran Church Visitor」一九〇九・一〇・七)

一九〇九(明治四二)年二月二二日、ブラウンは社団申請のために上京し、三週間ほど滞在して内務省に認可のための必要書類を提出した。東京滞在中の二月二八日、ブラウンは「東京の会員、准会員一同を神田美土代町青年会館の一室に招集して午後一時から礼拝を守り集会を催した。ここに東京に於けるルーテル教会の最初の礼拝が開始され、以後在京の宣教師スミスの指導の下に毎週聖日の午後一時半から、会員一同集まって礼拝を守ることが決議された」(福山猛編纂『日本福音ルーテル教会史』昭和二九年四月三〇日発行、九五頁)のであった。F・D・スミスはブラウン帰任とともにジェネラルカウンセラーから派遣された宣教師で、明治四一年一〇月一日、来熊後二週間して東京に移り、明治学院教授ラ

ンデス宅に留まった。その後、芝区田町八丁目一番地の教師館に移り住み、日本語研修と共に東京在留会員の修養を勤めた。神田美土代町・基督教青年会館での日曜礼拝に参集したルーテル教会員は、古瀬安俊（東京医科大学学生、五高花陵会第六回生、熊本教会員）、江副巽（東京法科大学学生、五高花陵会第八回生、熊本教会員）、武富、草野、古賀、坂倉らであった。これが後の東京教会の礎石となったのである。

また、ブラウンは東京滞在中、キリスト教主義学校を始めとする各学校の実状を視察調査した。先行開設されていた明治学院や青山学院などの教育課程、各学校の敷地や設備の実状を調査したのである。ブラウンは三月二日に熊本に帰任した。

公益法人の申請は認められ、同明治四二年六月二一日付で社団法人「在日本アメリカ合衆国南部福音ルーテル教会一致シノッド宣教師社団」の認可が内務省より下りた。認可を受けた宣教師社団は、同年七月六日、佐賀のリップパード宅で第一回総会を開催した。社団の「理事長には、C・L・ブラウン、会計書記にはA・J・スタイワルトを選出するとともに、ブラウンとミラーを任期一カ年、スタイワルトを任期二カ年、リップパードを任期三カ年の理事として選出し、理事長及び会計書記を熊本県裁判所及び日本政府に届けた」（徳善義和編著『日本福音ルー

テル教会百年史』二〇〇四年一月一〇日発行、二六頁）。

## 二 九州学院敷地を購入

学校敷地購入のための法的準備が整い、南部一致シノッド宣教師社団の熊本宣教師会はいよいよ敷地選定と購入に動き出す。実際に土地選定や購入に尽力したのは、熊本教会の山内直丸牧師や初代院長となる遠山参良五高教授を始めとする協力者たちであった。

『創立二十周年記念誌』（稲富肇編輯、昭和六年一〇月一日発行）・「座談会、その昔を語る」で、遠山院長が土地選定と購入について次のように語っている。ブラウンが遠山に九州学院長を依頼する以前のことである。

「ブラウンさんはその事（注・中学校を建てる件）に就いて頻りと言つてゐた。然し自分にその相談が来ようとは思はなかつた。ブラウンさんが米国から帰られて、地所を買ふ段取になつて、山内、福田、中原等の諸氏と自分も地所検分に行つたことがある。薬専の裏の凸凹の多い土地も其一つで、坪五十銭位といふことだつた。（稲富…五十銭ですか！）さう、現在の通信講習

所の建つてゐる辺りであつたが、其処は余り賛成者がなかつた。現在の地は山内君が上手に買取つた。ブラウン氏が自分に相談にやつて來られたのは土地購入後であつた」(七一、七二頁)。

この遠山院長自身の回想によると地所檢分に行つたのは、山内直丸(日本福音ルーテル熊本教会牧師)、遠山參良(第五高等学校教授)、福田令寿(熊本女学校長、熊本医学専門学校囑託教授、呉医師会理事)、中原淳蔵(熊本高等工業学校校長)らであつた。いずれも熊本のカリスト教界及び教育界で要となつて働き、協力し合つてゐた盟友である。ルーテル教会最初の教育事業であつた私立熊本高等予備学校でも、遠山は教授陣に加わり中心となつて働き、中原は開校式に臨席し積極的に協力してゐた。現在の大江村に敷地が決定すると、実際に土地購入の手續きに當つたのは山内直丸牧師であつた。

こうして一九〇九(明治四二年)一月二二日、熊本市外大江村字本(県立工業学校の南隣り、騎兵隊連隊の向隣り)に約一万坪の土地を二万五〇〇〇円で購入した。一坪二円五〇銭で、葉専裏の土地の五倍になる。前年、ブラウンがミッシヨンボード宛に送つた手紙によると、ブラウンは一万坪の土地を五〇〇〇ドル(約一万円)で購入できると目論んでいたようだが、実際の購入額はその二倍半になつて

しまつた。

買取した敷地は辺り一面桑畑で、北西方角には熊本製糸(長野製糸)の高い煙突が聳えていた。

《Office of the Dean Kyushu Gakuin (Lutheran Mission School) Kumamoto, Japan.》の横封筒に入つてゐた「九州学院土地収支報告書」(Statement of Kyushu Gakuin Land)が残されてゐる。一九一〇(明治四三年)四月付けのスタイワルトの手書きのものや、一九二一(大正一〇)年の土地購入履歴までタイピングされた文書(ミラー主事かホールン宣教師が作成か)などがある。その文書によると、

Official Statement  
of  
Land Purchase for Mission School at Kumamoto.  
Nov. 17 - 22, 1909.

Bought of	Tsubo	Cost per tsubo	Am't Paid
Kushina Sukeyoshi	1235	y. 3.00 Less y. 50.00 as Present to school	3655.00
Tsubaki Toyoto	703	y. 2.36 2/3	1663.77
Nishimoto Ishichi	807	"	1909.90
Kitaguchi Ryohai	304	"	719.47
Murakami Torakichi	239	"	565.63
Murakami Zentaro	778	"	1841.27
Nishimoto Suekichi	1846	"	4368.86
Fukushima Kotaro	171	"	404.70
Nishimoto Kyutarō	317	"	750.23
Uemura Toshi	102	"	241.40
Murakami Manji	356	"	842.53
Matsumoto Kantaro	81	"	191.70
Torii Tsuneto	674	"	1595.14
Ohta Hideo	390	" Plus y. 37.00 Given above current price	960.00
Tashima Kichihei	98	" " y. 13.00 " " " "	245.00
Nishimoto Soshichi	1291	"	3055.37
Matsuoka Susumi	36	y. 2.50	90.00
Nishimoto Soshichi	123	y. 10.00	1230.00
Total No. Tsubo	9551	Total Actual or net cost - - - -	y. 24329.97
		Actual or net cost per tsubo y. 2.5465+	
		Cost of Registration of Land	803.93
		Cost of Removing Kuwa and Koyashi	509.76
		Agent's Commission	423.69
		Total Gross cost - - - - -	y. 26067.35
		Gross cost per Tsubo y. 2.7282+	

Registration of Land Completed, and last money Paid, at 1.30 p.m., Nov. 22.

A. J. Stewart, Treas.

April, 1910.

熊本のミッションスクールのために購入した土地の公式報告書



明治四二年一月二日以後も順次学校敷地は買増されていき、現在の敷地となったのである。

明治四三年四月二六日、スタイワルトは九州学院の要務を帯びてローノーク会議に出席するため長崎から帰米するが、熊本を発つ直前にまとめた「熊本のミツシヨンスクールのために購入した土地の公式報告書」(一九〇九年一月一七日〜二二日分の手書き)をタイピングした文書を帰米する際に持参したと思われる。

一九〇九(明治四二年)年一月一七日から二二日までに購入した土地の全坪数が九五五一坪、三件の値引きを含んだ実際の支払総額が二万四三二九円九七銭となっている。その他、土地の登録料に八〇三円九三銭、桑や肥し(壺か)の撤去費用に五〇九円七六銭、代理委託料に四三三円六九銭掛かり、総額二万六〇六七円三五銭を要した。支払いは一月二二日午後一時三〇分に完了した。

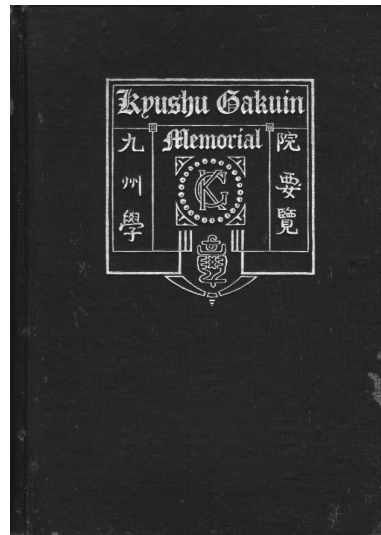
開校の翌年一九一三(大正二)年末頃発行されたと考えられる『九州学院要覧』(Kyushu Gakuin Memorial)の「The Property and its Cost.」(資産及びその価格)には、次のように記されている。

この要覧によると、開校時に総額五万五九〇〇ドル(約一二万円)程掛かったことになる。

一九〇九年一月二二日以降に購入された土地物



同表紙返し頁



『九州学院要覧』表紙  
[九學]の校章が上下逆さまになっている。

件も含めて、後にタイピングしてまとめられた「九州学院土地購入物件」の文書によると一九一六（大正五）年五月一〇日現在では、一万一五二二坪の土地に使った総額が三万九五四七円五二銭、くわの木撤去や購入、その他の経費に二六一五円三六六銭掛かっている。この購入土地物件の中で注目すべきものが、一九一三（大正二）年一月一六日取引分の遠山参良（Toyama Saburo）の四二五坪の土地である。覚書（NOTES）によれば、「遠山氏は名義上の土地所有者で、学校が土地代を支払い社団（shadan）名で登記できるまで、その土地を期間一〇〇〇年で貸与した。二軒の家を含む土地は、家屋に掛かる譲渡税を節約するため、壊れたものとして登録された」のである。一〇〇〇年に亘る貸与というのは、実質的には寄贈である。四二五坪の土地とはどの土地なのか。資料から検証すると、九学通り（旧・県道水前寺往還）の東側で東門（旧・正門）前の土地ではないかと推察される。つまり、大江教会、キリスト教書店ハレルヤ、隣接マンション一帯の土地ではないかと考えられるのである。この一帯は以前いづれも宣教師館敷地で、ルーテル教会宣教師社団が所有していた土地である。遠山氏の土地が譲渡された大正二年一月一六日以前の「九州学院平面圖」（大正二年四月測量）には記載されていない

が、それ以後の構内図には九州学院敷地として明確に記載されている。この推察が正しければ、遠山参良が院長となって九州学院を開校した後、遠山氏から宣教師社団に譲渡された土地に、宣教師館（現在は売却されマンションが建っている）が建てられ、大江教会（旧・九州学院教会）が建てられたということになる。

この土地の他に、正門（entrance）の北側と南側の九学通りに面した土地も開校後順次買い増され、学校敷地を整えていった。

### 三 九州学院設立認可

学校敷地を取得すると、ブラウンは一九〇九年九月二七日に開校していた路帖神学校の運営の傍ら、九州学院設立へ向け本格的に動きだす。遠山参良に相談に行き、ある程度院長就任受諾の感触も得ていたはずである。設立認可申請書などの準備は、山内直丸牧師が中心になって行なったと推察される。熊本高等予備学校設立の際も山内直丸は幹事として事務を担当し、路帖神学校でも実務は山内が担った。「九州学院」という校名も申請の際、ブラウンと相談のうえ山内直丸が付けたようである。

設立認可申請のために提出された文書類のうち



「私立学校設立認可稟請」と「設立要項及設立者履歴書」は次の通りである。

「私立学校設立認可稟請」

明治三十二年勅令第三百五十號私立學校令ニ依リ學校ヲ設立致候ニ付御認可相成度明治三十二年文部省令第三十八號私立學校令施行規則第一條ノ事項及設立者履歴書ヲ具シ此段稟請候也

明治四十三年一月十日

國籍 アメリカ合衆國ボルジニア州セーレム街

住所 熊本縣熊本市新屋敷町三百八十八番地

チャールス、エル、ブラウン

Charles L. Brown

熊本縣知事川路利恭殿

\*\*\*

設立要項及設立者履歴書

一目的 男子ニ中等程度ノ普通教育ヲ施スヲ以テ

目的トス

二名称 私立九州學院

三位置 熊本縣飽託郡大江村字大江四百七十七番

地、地所及校舎ハ別紙圖面ノ通り

但該地所及校舎ハ当分ノ間使用スルモノニシテ本學院敷地トシテ熊本縣飽託郡大江村字本ニ於テ約一万坪ヲ買入レタリ直ニ建築スル筈ニテ其費用約十萬円ヲ要スル見込ナリ

四學則 別冊ノ通り

五經費及維持ノ方法

創設費ハ約十萬円ノ見込ナリ

一年間ノ經常費ノ豫算額左ノ如シ

一金一万〇四百円也 収入

内譯

一金八千四百円也 授業料

一金二百円也 手数料

一金一万五千四百円也 支出

一金一万〇八〇円也 俸給

一金千六百円也 雜給

一金千四百四十円也 雜費

一金八百円也 修繕費

一金五百円也 臨時費

創設費及維持ノ不足金額ハアメリカ合衆國南部福音ルーテル教會ユナイテッド、シノッド傳道局ノ寄附金ヲ以テ支辨ス

\*\*\*

履歴書

國籍 アメリカ合衆國ボルジニア州セーレム街

住所 熊本縣熊本市新屋敷町三百八十八番地

チャールス、エル、ブラウン

西曆千八百七十四年十二月三日生

学業



西曆千八百九十一年九月アメリカ合衆國ボルジニア州セーレム街「ローノーク、カレッヂ」ニ入り全千八百九十五年六月卒業シ、バッチエラー、オブ、アーツ（得業士）ノ學位ヲ受ケ

全千八百九十五年九月アメリカ合衆國ペンシルバニア州フィラデルフヒア市エリー、マウンテン福音ルーテル神学校ニ入り全千八百九十八年六月卒業ス  
 全千九百〇七年一月前記「ローノーク、カレッヂ」ヨリ「マスター、オブ、アーツ」學士ノ學位ヲ受ク  
 全千九百〇七年五月アメリカ合衆國北カロライナ州ヒツコリー市ニ於ル「レノイルカレッヂ」ヨリ「ドクトル、オブ、デイビニチー」（神學博士）ノ學位ヲ受ク

職業・賞罰（以下省略）

この文書類をもつて熊本県知事に対し稟請がなされ、次の認可書のとおり明治四三年一月一九日を以つて認可された。九州学院はこの日を以つて、熊本縣飽託郡大江村字大江四七七番地に設立された。提出された教科課程表は「文部省訓令第十二号」に抵触しない教育内容で、聖書やキリスト教などの宗教教育は排除されたものであった。「私立学校令」によつて認可されたものの、学院校舎の形はまだなく、稟請書類に添えられた「地所見取図」と「建家ノ図」は現況の概略図（私立熊本高等予備学校の概略

図と推察される）に過ぎなかった。肝心の学院長も決定していなかったたのである。

熊本縣指令学第一〇四號

國籍アメリカ合衆國

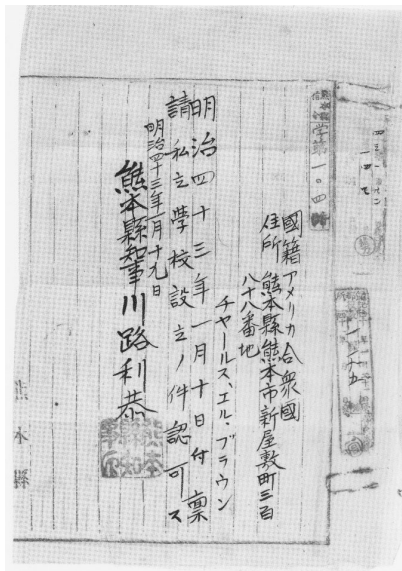
住所 熊本縣熊本市新屋敷町三百八十八番地

チャールス、エル、ブラウン

明治四十三年一月十日付稟請私立学校設立ノ件認可ス

明治四十三年一月十九日

熊本縣知事 川路利恭公 印



設立認可証



#### 四 スタイワルトの帰国とローノーク会議

九州学院の設立は認可されたものの、明治四二年秋から建築にかかり翌四三年春に開校するというづラウンの目論見は当初から崩れ、態勢の建て直しが迫られた。

日露戦争後、日本社会は戦後恐慌に襲われた。日露戦争の臨時軍事費の財源確保のため政府は多額の国債（内債六億円、外債七億円、計一三億一三五四万円）を発行し、総額一七億円以上の借金を抱え込んでしまった。戦費調達のため、地租、所得税、営業税、煙草専売、塩専売などを始め、織物消費税、石油消費税、砂糖消費税、通行税、相続税などの非常特別税がかけれ国民は増税に苦しんだ。甚大な犠牲を払いながら日露戦争は勝利に終わったものの、賠償金を得ることができなかったため、外国債の返済などが重くのしかかり財政を圧迫した。戦後も戦後経営のため、非常特別税は一九一三年まで継続され国民の負担は続いた。こうした重税が物価の高騰を招き、労働争議が相次いで起った。

一九〇七（明治四〇）年一月二一日、東京株式市場が大暴落し、戦後恐慌に陥った。翌明治四一年一月三日にはアメリカ恐慌の余波を受け、東京株式市場が再び大暴落、景気は完全に沈滞した。熊本では、

「恐慌のなかの不況下で、四〇年夏には春日駅（現・熊本駅）駅仲間たちのストライキ、四一年二月二日には人力車夫同盟会の結成式、この年一〇月には熊本市洋服縫工のストライキ、四二年一月二三日には天草郡魚貫村（現・牛深市）の鳶の巢炭鉱の不当解雇反対の争議で、坑夫一〇〇〇余人の暴動などが」（堤克彦『よくわかる熊本の歴史(3)』二〇〇四年一月一日発行、熊本出版文化会館、二五一頁）起きた。

物価の高騰とともに、土地や建築資材の価格、労働賃金も上昇し、九州学院建設費はブラウンが当初想定していた額を大幅に上回ってしまった。まず購入した土地代が、設定額の二倍半になってしまったのである。そのため九州学院建設の募金の訴えを主な任務として、スタイワルトが一時帰国する。

一九一〇（明治四三）年四月二六日、スタイワルト家族は長崎を発ち、ヨーロッパ経由で帰国の途に着いた。途上六月一四日にスコットランドのエディンバラで開催された世界宣教大会（World Missionary Conference）に臨席した。「この世界宣教大会は海外伝道に従事している世界の教会組織が現地の教会指導者を招き、海外ミッションにおける教会の設立に関連した相互協力を世界的エキュメニカル運動として受けとめ、それを最初に論議した大会であった」（『日本福音ルーテル教会百年史』二七頁）。



スタイワルトはこの大会出席後、七月七日に故郷バージニア州ルーレーに帰着したが、旅装を解いて間もなくの八月一七日、同州ローノークで開催された三つのシノッド・ボード代表者会に出席した。南部一致シノッドからR・C・ホーランド、ジェネラルカウンシルからジョージ・ドラ、一致デンマーク教会からはA・C・ニールセンが代表として出席し、スタイワルトは日本の教会を代表して出席した。この会議は日本伝道の基礎を更に強固にし、その発展を期するため、日本に於ける伝道上の財務を統一するのが目的であつて、このため三シノッドの日本伝道は日本に於ては一体となることを「『日本福音ルーテル教会史』一〇〇、一〇一頁）決議した。

この決定により日本のミッション・スクール（九州学院と路帖神学校）の維持と運営は、三つのボードによる共同ミッション活動として行なうことになつたのである。以後、各シノッド・ボードは日本伝道のために年間一五、〇〇〇ドルを負担し、更に学校設立のために二五、〇〇〇ドルの追加支出が可決された。

スタイワルトが日本に帰ると、「ローノーク会議の決定に従つて、同年一二月一四日、熊本で第一回在日宣教師共同会議が組織された。メンバーは、ブラウン、リップード、スタイワルト、ミラー、ウイ

ンテル、ネルセン、スミスの七名である。会則が議決され、それに従つて、ブラウン議長、スミス書記、ミラー会計を選出した」（『日本福音ルーテル教会百年史』二八頁）。

## 五 開校準備と遠山参良初代院長就任

一九一〇（明治四三）年一月一九日に九州学院は設立が認可されたものの、校舎の建築と設備が開校予定の四月までに完成しなかつたため、開校を一年延期せざるを得なくなつた。

アメリカのシノッド・ボードからの更なる財政支援を請願するために帰国したスタイワルトの成果に期待しつつ、学校施設の建築が進められた。スタイワルトが帰国するとブラウンや山内直丸の負担が増した。神学校の運営や授業と並行して、九州学院建設の膨大な業務をこなしていかねばならない。明治三一年一〇月二日の熊本伝道開始以来、一二年に亘つて牧会、教育事業、紫苑会の社会事業など精力的に働いてきた熊本教会の山内直丸牧師が、九州学院設立準備のための多忙も重なり、とうとう疲労のため健康を害してしまう。そのため山内直丸一家は明治四三年七月、博多東公園に移り、箱崎湾頭白砂青松の裡で静養するため熊本を去つた。ルーテル熊

本教会及び九州学院にとつては大きな痛手となり、教会では取り敢えず、前年三月に伝道者として熊本に來任していた鷲山誠信を主任として迎え、伝道と牧会に当たらせられた。

そこにローノーク会議の吉報が届いた。南部一致シノッド、デンマーク福音教会、ジェネラル・カウンスルの三シノッドによる教育事業協約締結と、ミッション・スクール建設のため更に二五、〇〇〇ドルを追加する決議である。これによりミッション・ボードの共同支援体制が整った。次は開校へ向けた九州学院の態勢づくりである。

遠山参良五高教授が九州学院初代院長就任を受諾するのは、この明治四三年のことである。ブラウンは三顧の礼を尽して遠山を初代院長に迎えた。ブラウンが遠山に院長就任を頼みに行ったのは、九州学院の土地購入後のことであった。遠山はこう回顧している。

「最初頼みに見えたときは、余り乗り気もしなかつた。然し再三話がある内に長崎以外には九州にこの種の学校はなかつたし、興味が湧くやうになつた。そして遂に承諾した」(『創立二十周年記念誌』「座談会その昔を語る」七二頁)。

遠山は熊本高等予備学校開設の際には教授陣の中心となつて積極的に支援し、九州学院の土地検分に

も立ち合つていた。母校の鎮西学館で教職に就き、第五高等学校で多くの人材を育成し、花陵会の指導を中心的に担つた遠山である。熊本バンドを生み出した熊本洋学校や熊本英学校がかつて存在した熊本に、キリスト教主義の学校を創立する意義は充分に認識していたはずである。また、人格形成と立志を目ざす青少年期に、キリスト教精神による訓育が必要であることも知悉していたはずである。そして、そうした思いをいつしか抱懐していたことも。

ブラウンは、キリスト者・遠山参良に対する神からの召命であるかのごとく、絶対的な信頼を以つて院長就任を依頼した。謂わば遠山は、ブラウンを通して神からの召命を拝受したのであった。

九州学院院長就任を受諾した遠山は、同年九月三日に第五高等学校を依願免本官(注・疾病二由ルと記されている)となり、講師嘱託となる。官立で相当高い官位の教授職を擲つた私立中学校の院長就任である。翌一〇月から遠山は、五高で嘱託講師として英語を教授する一方で、私立九州学院創立に従事する。五高が遠山を離さなかつたのである。先々五高教授に復帰する可能性を五高側が算段していたのかもしれない。兎も角、施設の建築工事は急ピッチで進められた。

翌一九一一(明治四四)年二月には生徒寄宿舎が



DORMITORY FOR 100 STUDENTS—Two Buildings—Length of each 126 ft., width 24 ft.

寄宿舎



GYMNASIUM—Length 48 ft., width 36 ft.

雨天体操場



HOME OF PRINCIPAL.

学院長宅

竣工、他に雨天体操場、院長住宅、職員住宅（教頭宅と舎監宅）も完成し、開校できるだけの施設がほぼ整った。また遠山参良の計らいで各学科担任の教師もほぼ確定した。

同年三月一八日、遠山参良（満四五歳）は正式に九州学院長に就任した。ブラウン（満三七歳）は主事に就任し、二人の盟友によって九州学院の支柱がキリストの名において据えられた。

後にブラウン主事は、ある席におけるテールスピーチで、「何か私に成功だと自慢してよいことがありとせば、それは私が九州学院長に遠山先生を得たことである」（『故遠山参良先生』・川崎升「遠山先生を偲ぶ」九八頁）と語ったことがあるが、正しく九州学院は神によって召命された人によって始まったのであった。

（以下次号）